れる。

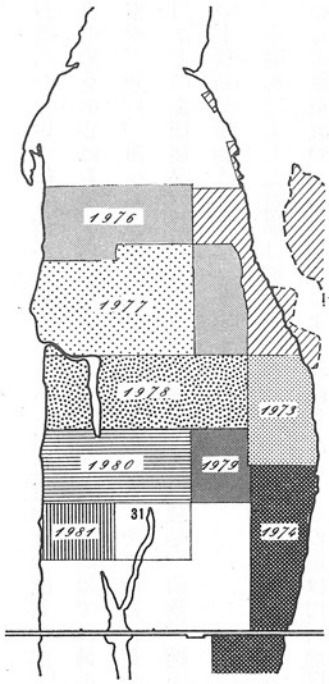
(5)は五輪形をした板塔婆で、地輪下部欠損。表裏両面の空輪部に大日如来と思われる種子が墨書されているが、以下は不明。

(6)は右縁部欠損。表面刃物による切痕顕著。

9 関係文献

広島県草戸千軒町遺跡調査研究所『草戸千軒町遺跡—第31次発掘調査概要—』（広島県草戸千軒町遺跡調査研究所年報一九八二　一九八四年三月刊行）に掲載予定。なお、調査の概要については、小田原昭嗣・福島政文「草戸千軒町遺跡第31次調査概要」（調査研究ニュース『草戸千軒』No.122、一九八三年）に略報告している。また、(5)については篠原芳秀「資料紹介　第31次調査出土の信仰・呪術関係遺物」（調査研究ニュース『草戸千軒』No.113、一九八二年）、(4)については同「資料紹介　第31次調査出土の木製品」（調査研究ニュース『草戸千軒』No.119、一九八三年）に報告している。

（小田原昭嗣・志田原重人）



第31次調査区位置図

高知・田村遺跡

1 所在地　高知県南国市田村字桂昌寺中

2 調査期間　一九八二年（昭57）一〇月～一一月

3 発掘機関　高知県教育委員会

4 調査担当者　森田尚宏

5 遺跡の種類　城館跡

6 遺跡の時代　室町時代（十六世紀）

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

高知空港の拡張に伴い、田村遺跡群は一九八〇年から一九八三年まで発掘調査が実施された。それによって検出された遺構、遺物は弥生時代全般と中世—室町時代を中心として、古墳、平安、さらには近世、近代のものである。特に中世の遺構としては、溝に囲まれた掘立柱建物群を中心に、多数のピット、溝、土壙が検出されている。また溝に囲まれた掘立柱建物群には

（高知）

石組みの井戸を伴う例が多数みられる。出土遺物は土師質土器、瓦質土器を中心に青磁、白磁などの輸入陶磁器、国産陶器では備前、常滑、瀬戸、魚住などの製品がかなりみられる。その他には渡来銭、釘などの金属製品、砥石、石硯、石鍋などの石製品、曲物、椀などの木製品が量的には少ないが出土している。

木簡を出土した遺構は城館の堀跡であり、空港の本体より北へ延びる水路造成のための調査により検出された。この堀は田村地区の北に所在する田村城館（土佐国の守護代である細川氏の居城で地元の歴史地理学者、島田豊寿氏により城館の範囲が「長宗我部検地帳」を使って推定されている。）に付随する外堀と考えられる。検出されている堀は西辺の南部から南西コーナー、さらに南辺の一部である。規模は幅四～五m、深さ三mを測り、断面は逆台形を呈している。堀の埋土は青灰色粘土であり、下層部は黒灰色を呈する単一層である。出土遺物は非常に少なく、底面直上で若干の土師質土器片、備前焼片が出土しているにすぎない。他に木葉、枝、松かさなどの自然遺物も出土している。木簡の出土位置は堀の南西コーナー部のやや北よりであり、やはり底面直上の青灰色粘土層より出土している。出土状況は木簡の周辺、約一mの範囲に完形の手づくね土師質小皿八個体と杯四個体が一括して出土している。このような出土状態はしかるべき信仰行為の結果として一括廃棄されたものと考えられ、併せて堀の存続および廃絶の時期を示すものとも考えられる。

8　木簡の釈文・内容

木簡は先頭部を圭頭とし、下部は破損している。材質は板目材であり、杉板とみられる。

釈文は次の通りである。

「　　歸命十六善神□□
（梵字）奉轉讀大般若經一部六□　×　（252）×43×7　061
大永□年□□

墨痕はかなり薄くなっていたが、字は浮き出ており明確に判読できた。文頭には金剛界大日如来を表わす梵字（バーンク）が、右下の文頭には般若菩薩を表わす梵字（ジーク）が見られる。本文の左下には大永（一五二一～一五二七年）の年号が判読できるが、以下の年数については判読不可能であった。

内容については大般若経を転読したことを記すものであり、病災を除去するために使用された御札である。なおこの御札には打ちつけた痕跡はないので、しかるべき場所に安置したと考えてよかろう。内容的には一般にみられる形式であり、ほぼ同じ内容の御札が草戸千軒町遺跡で発見されている。また県内では吾川郡春野町芳原城から同じ内容の、しかも明応の年号の判読できるものが最近出土していることを付記しておく。

9　関係文献

高知県教育委員会『高知県田村遺跡群』（一九八三年）

（森田尚宏）